

生命主義哲学から生命主義文芸論への階梯

——生命主義者としての西田幾多郎、その小林秀雄に与えた影響の一面——

有田和臣

1 生命主義者としての西田幾多郎という観点

2 『ニイチエ研究』、「緑色の太陽」、およびその周辺

3 『善の研究』とそれ以後

4 小林秀雄の中の西田幾多郎——両者の“シンクロニシテイ”

本稿では、西田幾多郎の思想を生命主義に位置づける観点が現れてきた経緯を概観し、実際にそれが生命主義の観点から読み解き得ることを例証した。また西田の周辺にあつて相互に密接な関係をもっていた、高村光太郎「緑色の太陽」、和辻哲郎『ニイチエ研究』、および阿部次郎の著作等に共通して見られる特質が、「生の哲学」や生命主義の萌芽期にあたる思潮とは区別される「大正生命主義」に属するものであることを例示し、とりわけ『善の研究』とあわせて「緑色の太陽」、『ニイチエ研究』が、その成立過程の探索に重要な鍵となる事実を指摘した。人格主義と生命思想の融合という特質をもった大正生命主義の主たる起源はおそらく明治初期より存続する芸術教育論思潮にあり、登張竹風の著作等がそれを示唆している。西田幾多郎の『善の研究』、および大正期の著作もまたその中に位置づけられ、さらにそれらが小林秀雄の生命主義的な文芸論の一流源となつている事実を例証した。

1 生命主義者としての西田幾多郎という観念

その独自性と難解さで知られる西田幾多郎の思想に大正生命主義思想との接点を見出したのは、管見では美術史分野における永井隆則（一九九六年発表論文）が最初である。永井は「日本におけるセザンヌ受容史の一断面」において、「芸術を人格の反映とし、芸術作品において現れる人格を感覚や技巧より高次の価値領域として想定」する「人格主義美術批評」（永井による用語）が「一九一〇年から一九二〇年代にかけて」日本の美術批評界に登場し、「圧倒的主流となっていく」様を指摘する。さらにそうした動きと並行して「西田幾多郎、中井宗太郎、阿部次郎らによって『人格』概念は美術を記述する基本概念として、ヨーロッパの美学を包摂する高次の思想として展開されていった」とする。美術史家の中井宗太郎はさておき、西田や阿部らの、従来美術論を少なくとも専門とはしない位置づけで考えられてきた文人たちに、美術批評の新傾向と連動する動きの見た点が目につく。永井は西田の「芸術的作品は我々の内面的生命の発露である、我々の人格の創造である。」（「感情の内容と意志の内容」一九二二年）といった発言の例を挙げ、「西田にとつて芸術において問題となる『人格』とは、視覚や触覚といった感覚的世界を動かし

ている生命（意識や主体と言い換えることもできる）の動きであり、色や形、構図といった目に見える世界の背後に控えていて、目に見える世界を目に見えるものとして出現させる目に見えない世界であった」と結論づける。こうした、理性によつて統御される認識活動の背後にあり、しかもそれらの活動の基底となるような原動力として「生命」の活動を配置する構図に、主に大正期の日本に流行した生命主義思想の典型的な特徴を看取することができる。

永井にはその後にも、「人格」を軸とする美術批評、すなわち「生命」を「心身一如の活動とみなし、人間存在全体の現れとして、作品を総合的に把握しようとする」鑑賞法の延長上に西田幾多郎の芸術論をとらえた論考（二〇〇二年）^②があり、一連の「人格主義美術批評」を主題とする論考群をまとめた著書『セザンヌ受容の研究』（二〇〇七年）^③においても、四頁にわたる「西田幾多郎」の項を設けている。たしかに永井が指摘する通り、「人間存在全体」を包括的にとらえるためのキーワードとして「生命」「肉体（身体）」「人格」等が布置されるのが、広義の生命主義すなわち西欧的な「生の哲学」とは区別される、大正生命主義に特徴的な現象であり（加えて言えば、「生命」がそれに連なり同調するところの「宇宙」が、合わせて重要なキーワードとなる）、しかもこの現象は明治初年代に始ま

る芸術教育論の発展形として明治四十年前後に成立した「生命主義芸術教育論」(有田による用語)に明瞭に見られるものでもあった。⁴⁾したがって、永井はあくまで「美術を記述する基本概念」としての「人格」概念の広がりと言ったわけだが、実際にはむしろこうした現象は、その範疇を越えたより大きな思想潮流の一部であったと考えられるのであり、論者は別稿でその一端の例証を試みた。生命主義芸術教育論思潮は、その成立期と同じく明治四十年前後より展開され始めた片上伸、西宮藤朝らによる生命主義的な文芸批評および文芸教育論、およびニーチェ思想を生命主義的な観点からとらえたものと考えられる和辻哲郎『ニーチェ研究』⁶⁾、さらにそれらの影響下にあると見られる小林秀雄の文芸批評にまでも波及している。

つまり西田幾多郎に関わる永井の指摘は、美術批評や美学論の範疇にとどまらず、より広く大きな思潮に関係する広がりを持つているものである。永井は高村光太郎の美術批評をはじめ、柳宗悦ほか白樺派の美術批評にも「人格主義美術批評」の特徴を見出ししており、するとそれはまた、白樺派を含みながら且つそれを超えた生命主義的なスタンスを持つ言論すべてを包括する、より大きな思想潮流の中に西田幾多郎も位置づけられるという事実をも示唆していることになる。その意味でこれは、明治期から大正期にか

けての哲学、文芸分野にまたがる重層的動向をとらえるための視角として、大きな可能性を開くものであり、本稿での論者の視点も永井論の延長上にある。以下、本稿で断りなく「生命主義」という場合は、日本的な生命主義すなわち大正生命主義を意味している。

西田と生命主義の関係についての言及自体は、早くは鈴木貞美編『大正生命主義と現代』(河出書房新社、一九九五年三月)所収の、中村雄二郎「哲学における生命主義」に見られる。しかしこの論題を与えられた中村は西田の思想に生命主義傾向を特段に認めていないので、それを「発見した功績は永井にあるだろう。ただ、編者であった鈴木貞美は一九九八年になって「西田幾多郎『善の研究』を読む——生命主義哲学の形成」⁸⁾において、西田の『善の研究』(一九一一年)が「主客未分、主客合一の『純粹經驗』に軸を置いており、「生命」の語は「目立つほど用いられていないが、その体系の中心を貫く概念である」とし、大正生命主義の潮流に位置づけられる思想家として西田をとらえている。その後も二〇一〇年十一月、ワルシヤワで開催された「日本文化——その価値観の多様性」西田幾多郎生誕一四〇周年記念シンポジウム「基調報告で「西田幾多郎と生命主義」⁹⁾と題した発表を行うなど、継続的な探求が見られる。

以上のような動向を反映して、生命主義の観点を軸とした西田論が二〇〇〇年頃から散見されるようになった。と言っても、多くは西欧的な広義の「生命主義」（生の哲学）との関連を論じたもので（科学や宗教の観点からの「生命」との関係を論じたものもある）、「人格主義」との融合のうちに生まれた日本独特の「大正生命主義」の特質をとらえて得てはいない。その中であつて明確に大正生命主義の観点を表明したものに、檜垣立哉「西田幾多郎と大正生命主義」(『西田幾多郎の生命哲学』講談社学術文庫、二〇一一年一月所収)がある。

檜垣はこの論考で西田の『善の研究』に示された「生命的な論述の核心」を、「明治期に輸入」された「近代的自己意識」の「解体」、およびそこからの「自然に向けた脱出」すなわち「脱我的な自然への解放」に、見出している。一面、そうした自然との一体化による自我の乗り超えという発想が、個や主体の存在意義を看過し過ぎていることから、「統合失調的な流れに至る」可能性を指摘する。その結果、「中心なきアナキー性にいき着くか、あるいはその補充物でしかない全体主義的な保守主義に折り重なるか」しかなくなると言うのだが、前者の例として檜垣が挙げるのは、平塚らいてうの心中未遂事件（煤煙事件または塩原事件）や、三角関係の上刺された大杉栄の日陰茶屋

事件である。これらが「自己脱出を逆手にとつた道徳的な逸脱」ではないかとしつつ、それは「大正生命主義的な自然主義が、反面にそなえているロマン主義的な人格主義的色彩を払拭しうるのか」という問題、つまり自然への自己同一化による「自己解放」の道がもつ本質的な曖昧さと関わってくると言う。そうした点に、大正生命主義の負の側面があると指摘しているわけである。

檜垣は大正生命主義を、主に「本能満足主義」に代表されるような自然主義的風潮と重なるものと理解している。しかし、そこには明治末の歪曲された形でのニーチェ主義はかかわってくるかもしれないが、生命主義自体の関与は薄いと考えられる（和辻哲郎『ニーチェ研究』を介して、大正期のニーチェ理解と生命主義とは密接な関係をもつのだが）。右に述べてきたように、生命主義は一部の自然主義陣営と目される作家・評論家（片上伸のような）のみならず、白樺派をはじめ、和辻哲郎のような哲学畑の思想家、および一群の生命主義教育論者たちにも広がりを見せる思潮であり、そこに「道徳的な逸脱」はほぼ見られない。それどころか、大正生命主義はその直系の源流に、宗教教育色・道徳教育色を濃厚にもつ芸術教育論思潮をもっており、檜垣が言うような「不道徳なことをおこなうこと、その政治的なインパクト」を標榜する方向とは正反対と言つてよ

い方向性を、歴史的には中核にもってきた。その方向性を端的に言い現わした語が「人格主義」であり、その意味で「人格主義」は檜垣が言うような単なるロマン主義的、気分的なものではなく、大正生命主義を支える屋台骨でもあった。

日本的な生命主義は明治末から大正期末にかけて、むしろ「人格主義教育」に盛んに援用されてきた経緯があり、そうした教育論で繰り返し論じられた「宇宙生命」との合一、という主題は、国家主義と背中合わせの方向性を与えられていた。つまり、宇宙的なものとの合一により個人の「根本生命」の力(意力)を増大することによって、その個人のプラス面での可能性が無限に解放される、という一見自由主義的な生命主義のスローガンの裏には、それによって主体的・積極的に国家に寄与する力を付与される、という暗然たる目的意識があった¹⁾。その点について言えば、檜垣が言うとおり、それは「全体主義的な保守主義に折り重なる」のかもしれない。

ただし、たとえば片上伸に代表される大正期文芸教育運動は、「生命主義教育論」と言っつてよい明瞭な特徴をそなえつつも、あくまで個人の自由な生命力拡大(自我解放、あるいは自己拡大と言換えてもよい)をめざしたものであり、国家主義を暗に内包する生命主義芸術教育論とは似

てもって、志向性を異にするものだった。生命主義思潮が全体としては共通する主題、論法、用語、語法等をもちながらも、流行時期やそれが流行した分野によって、大きく異なるベクトルを内包している事実には注意を要する。大正生命主義を論ずる際に、視野に入れておくべき問題であろう。

ここで生命主義形成の流れをあらためて概観しておけば、まず大正生命主義が成立するにあたってその源流に、明治初期に始まる、「道德」・「宗教」教育と一体化した形での芸術教育によって国民の国家への貢献力、言い換えれば「気格の高尚化」をはかろうとする動きがあった。その動きが明治三十年頃を境に、人間陶冶を標榜する「人格主義教育」の体裁をとるに至り、さらに明治四十年前後から生命主義的な論法・語法を吸収することによって、人格主義と生命主義とが一体化した、日本的な「大正生命主義」が形成されるに至った。するとこの思潮はまず、芸術教育、または芸術論をその発想の核にもっているものだということが言える。次に言えるのは、啓蒙的、道徳的色彩を濃厚にもつ思潮であるはずだということであり、事実、この思潮に属する言論は基本的に「芸術」および「倫理道徳」(そしてしばしば「宗教」)への言及を伴っている。阿部次郎など、大正教養派と言われる人々はかなりの度合いで

この特質をそなえている。西田も例外ではない。そしてこの思潮はその成立経緯からわかるように、国民教化のための有力なツールという性格を帯びているもので、国家貢献への傾斜を全体としては孕んでいたのだが、たとえば生命主義の一翼である文芸教育論がむしろそれに対する反動と言えるような方向性をもっていったように、一概にひとくくりにはできない面がある、ということである。檜垣が言うような「全体主義的な保守主義に折り重なる」スタンスを内包しているかどうかは、個々に検討が必要になる。

2 『ニイチエ研究』、「緑色の太陽」、およびその周辺

大正生命主義の成立要因については、論者が別稿でこれまで言及してきたように、和辻哲郎『ニイチエ研究』（東京内田老鶴圃、一九一三年）が重要な鍵を握っている。『ニイチエ研究』には、相当の広がりを見せる生命主義的な芸術論、教育論等にかかわる言論群全般に共通する、生命主義的な用語・語法がきわめて典型的に確認できるからだ。『ニイチエ研究』を生命主義においてとらえる観点は、論者の論考以外には未だに大変まれな状況ではあるが、次にそうした認識は広がりつつある。

たとえばニイチエ受容史を専門とする湯浅弘に、生命論

の観点から『ニイチエ研究』をとらえる論考（二〇〇二年）がある。湯浅は『ニイチエ研究』を「ニイチエの生の哲学の解釈」であると同時に、「和辻自身の生の哲学の書でもある」と定義した上で、「和辻の解釈のスタンス」には「人格の陶冶、向上」をめざす「大正教養主義に共通する思想の萌芽を読みとることができる」とする。また「最も注目すべき点」として、「人が創造的な働きそのものとしての『自己』に化するとき、権力意志として宇宙の本質と通底すると見ている」ことを挙げ（「権力意志」は、現在では「力への意志」と訳される、生命の根本動力を指す用語）、そこに内包される「『自己』即ち『権力意志』即ち『宇宙の本質』といった等式」が、「創造的な働きそのものとしての『自己』と化した人間同士は自ずから宇宙の本質を介して同一の地盤に立っている、あるいは立てるはずだ」という「生の形而上学」を可能にしている様を読みとっている¹²。湯浅の指摘は、「大正生命主義」を明確に意識したものではなく、あくまで西欧的な「生の哲学」の観点からなされているのだが、「人格」、「宇宙」等をキーワードとする生命主義的発想の基本パターンをよくとらえており、「大正教養派」との親近性を見る指摘もまた的確で、論者の調査結果とも合致する。

早い時期に西田幾多郎と大正生命主義の関係を論じてい

た鈴木貞美も近年、『ニイチエ研究』に注目し、和辻のニイチエ解釈とその成立過程に検討を加えており、その観点は右湯浅論をさらに進展させたものと位置づけられる。鈴木は『ニイチエ研究』の核心が「宇宙生命との合一」を理想化する体系であるとしつつ、そうした「観念」の成立背景を、ベルクソンをふくむ「生の哲学」の流れから汲みあげられ、「確立」されたものと見、さらに日本の高山樗牛、阿部次郎らの著作、岩野泡鳴「神秘的半獣主義」（一九〇六年）、および『善の研究』が「宗教の本質として説く『永久の真生命との合一』」、等からの影響をあげている。湯浅論にも言及されていた、芸術家の「根本生命」が「宇宙生命」に繋がることを理想とする主題は確かに生命主義的発想の兆候を示す重要な指標の一つであり、西田『善の研究』中にも見られるところである。

しかし鈴木が『善の研究』を「宇宙生命との合一」という観念の最も直接的な源流と見なしているらしい点については、論者はただちには同意できない。生命主義、という観点のみから言うならば、『ニイチエ研究』に見られる生命主義独特の論法、表現語法の多彩さは、『善の研究』の比ではなく、発表時期を度外視して両者を比べれば、むしろ『ニイチエ研究』を元に『善の研究』が書かれたのではないかと思われる一面さえあるからだ。何よりも『善の研

究』に、『ニイチエ研究』には頻出する「生命」や「生活」（もちろん「DAS LEBEN」の訳語）という生命主義のキーワードが用例としてまねなばかりでなく、鈴木の言うようには、明確に生命主義的な文脈では見られない¹⁴。生命主義的な文脈で、「生命」にあたる意味内容に使用されるのはもっぱら、「人格」という用語である（その用例については次節で例証する）。これは『善の研究』が、『ニイチエ研究』ほどには完成された生命主義の産物ではなく、その黎明期の所産であることを意味している。大正生命主義を歴史的観点から見れば、明治初期発祥の芸術教育論思潮が明治三十年頃より「人格」陶冶を標榜する論法を身につけて、明治四十年前後から「生の哲学」を援用・吸収することによって、「人格」とほぼ同義の用語として「生命」の語を用いるに至り、誕生した。その狭間に『善の研究』は、ある。

一方、『ニイチエ研究』の生命主義的用語・語法は、その後の生命主義教育論、文芸教育論等に広く観測されるそれとの、高い同一性を示している。つまり、多くの生命主義的言論が、用語・語法の上で『ニイチエ研究』を発祥とするかの観を呈しており、そのさらに源流として十全な要件をそなえていると思われる言論の存在を探ろうとすると、鈴木が挙げた事例では（それは多岐詳細にわたったものだ

ったが)まだ足りない何かがあると考えられるのだ。

例えば『ニイチエ研究』と並んで、生命主義成立の鍵を握ると思われるのが、高村光太郎の美術批評である。生命主義的発想を顕著に示す美術評論「緑色の太陽」の発表時期は一九一〇(明治四三)年と『善の研究』より早く、もちろん『ニイチエ研究』を参照してはいないはずである。

ここで高村は、芸術家(画家)の「PERSÖNLICHKEIT」(人格)に無限の権威を認めつつ、芸術作品製作時に作者の人格がいかに「充実」したはたらきをしているかを感じとったうえで、作品の評価・位置づけを「DAS LEBEN」(生命)の量によつて「判定したいとしている。ここにはすでに生命主義における「人格」と「生命」の不可分の関係が表明されており、美術作品からその作者の人格を感じとることがイコール、作者の「生命」力の度合いを測ることとして意識されている(別稿で論じたように、和辻『ニイチエ研究』にも、まさに同様の発言が見られる)。

しかもこれは高村ひとりの様態ではなく、たとえば白樺派の一員として高村と近い位置にいた柳宗悦は一九一二年(明治四五)年に発表した芸術論で、「芸術は人格の反映である」としつつ、人格は「表現せられたる個性の謂に外なら」ず、「従つて芸術の権威とはそこに包まれたる個性の権威」である、「而して個性の権威とはそれが全存在の充

実に於て始めて発露せらる可きものである」のだから、「生命の統一的全存在そのまゝなる表現こそは芸術最後の極致である」、「永遠なる芸術とは感覚及手工の作為に非ずして、全人格の働きである」とする。ここに見る「生命の統一的全存在」という語は、「人格」・「生命」を軸に、心身の活動を含む芸術家の生命活動の全体を統一的にとらえようとする生命主義に典型的な発想を端的に表明したものである。

柳はさらに「美とは芸術の目標に非ずして、自己の表現こそは其目的である。美とは只其表現に伴ふ必然の開発に過ぎない。然も芸術が人生の嚴肅なる全存在の表現たる限りそれは常に真にして美である。」と続けており、いわゆる白樺派的な自己表白肯定の姿勢を示しているように見える。しかし生命主義の文脈を理解した上でこれを読めば、この「自己」は恣意的に思いをめぐらせる一個の主観といった体のものではなく、むしろ意識的な操作が不可能であるような、自分を突き動かす意識以前の活動力にかかわる、心身の活動全体を含み込む、その人の生命活動のトータルな営みを意味している。別稿で述べたことの繰り返しになるが、白樺派にかかわる文芸家たちに特徴的な自己肯定傾向も、この文脈でとらえられることによって、本来のニュアンスが了解され得るものである。

先の高村光太郎「緑色の太陽」の執筆背景となった「生の芸術」論争とかかわる山脇信徳には、「私の称して人格といふのは、其外来刺激も、反応も、発表も総て之等のものを一團として人格即ち官能の全的存在としたのです。官能と云ふものは、生理の方面のみから考ふべき文字ではありますまい。心理の方からも考へた時、官能の全的存在即ち人格なるものが人間の全部を蔽ふことになる。」¹⁹⁾といった発言が見られ、ここにも芸術家の「生理」と「心理」すなわち心身両面を含み込む「官能」の営みの全体を、「人格」の定義としていることが確認できる。

和辻『ニイチエ研究』は「凡て人間の活動には意識以上のもものが根本動力となつて活らいてゐるので、これなくしては例へば芸術の創作や恋愛などを根本的に了解することは出来ない。」²⁰⁾として、意識による統御を超えた「根本動力」重視のスタンスを示す。この「根本動力」が、「意識に対して、方向と活力とを与へるもの」なのであり、和辻はそれを「権力意志である。神秘的な直接的な事実である。」²¹⁾と言ひ換える（「権力意志」は意識によつては統御し得ない根本的な動力を指す『ニイチエ研究』のキーワードであり、生命主義的な文脈での「生命」とほぼ同義の意味をもつものであった）。こうした、意識以前の活動力こそが生命活動の本質であると見て、その営みをトータルにと

らえようとする姿勢が『ニイチエ研究』を貫いている基本姿勢の一つだと言える。

したがつて和辻が「純粹なる心的活動はニイチエにあつては人間の全的活動に外ならぬ。」²²⁾と結論する時、「純粹なる心的活動」とは単なる情緒的観念的営みではなく、山脇の言うような心身一体化した生命活動の全体を包含する「全的存在即ち人格」の営みを指している。和辻は「人格は権力意志である。征服と創造とに努むる権力意志である。」²³⁾とも言い換えており、「権力意志」や「生活（生命）」が、「人格」とダイレクトに連なる概念であることを宣言している。するとここで言う「人格」の意味領域の範囲は、心身の活動を含む生命力の営みの全体にまで押し広げられたものとなる。これはきわめて生命主義的な「人格」の用例なのである。

『善の研究』発刊以前から以後にかけて、白樺派周辺に生命主義に典型的な発想がすでに形成されつつあった状態について述べた。出版以前に、『善の研究』に述べられた思想が文芸家たちに影響を与えていないと断言はできないが、白樺派周辺の文芸家たちが西田ら哲学畑の著述家たちの動向にさほどに敏感に反応したとも見えなしい、逆に西田が高村らの言論を模倣したとも考えられない。両者が共通して参照した「何か」があると考えるのが、妥当なところ

ろではないだろうか。この時期の生命主義傾向を示す言論の実に多くが美術批評にかかわるものである点を鑑みれば、その何かにもまた、大正生命主義形成の歴史を準備した芸術教育論思潮が深くかかわっていると考えられるわけである。そこに『ニイチエ研究』の存在が大きなカギとなるような動向があったと推測される。

たとえば、明治期の有力なニーチェ紹介者であった登張竹風による人格主義的教育論書『新教育論 芸術篇』（一九〇三年）中の文言にはすでに、「自己の、幽深なる、内部より遠く宇宙の究極に向てその双眸を放つ」ことを理想として、ヘーゲルほか高名な哲学者たちの思想が価値あるのは「彼等の哲学思惟が各々宇宙の永劫的生命を参照せしめたがため」であり、「彼等の哲学は、こゝに於てか、芸術品と同等の生命を有す」、²⁴といった表現が見られる。この書は未だ明確な生命主義の産物とまでは言えないが、生命主義に特徴的な発想、用語（自己の深奥が宇宙の生命に繋がるといふような）が散見され、そうした発想が、教育、芸術、ニーチェ思想といったキーワードの周辺に発祥した可能性を濃厚に示しているものである。前記鈴木木言う「宇宙生命との合一」という主題それ自体は、大正生命主義の明確な成立期以前に、すでにそれを成立させるための下地として芸術教育論史上に存在していたのだから、大正期に

独特の生命主義であるところの「大正生命主義」の一特質ではあっても、その思潮を代表する著作の中心的特質と見るのは、やや妥当性を欠くのではないだろうか。

明治末より芸術、教育、哲学、文芸等の分野に広く流行した大正生命主義は、その歴史にあたる生命主義的な発想の萌芽期（たとえば鈴木木も言及する北村透谷「内部生命論」のような）にはなかつた特質がある。それゆえに多分野にわたる、萌芽期には見られなかつた流行を現出したと考えるべきであろうから、そうした前史との境界線上で起こつた変質（「人格」概念と「生命」概念の明確な融合、など）を検証することには意味があるだろう。そのような変質を経た大正生命主義の独自性は、人格や生命（「宇宙の秩序」がその上位にイメージされているような）を、意識的「自我」の規制を取り払い、本来の純粹な力として発現させることによって、生の営みの全体を有機的に統合し、生の営み全体としての機動力を無限に高めるような「統合力」としてとらえるところにある、とひとまず現段階では定義づけておきたい。

西田幾多郎はどのようにして、その典型的な生命主義的発想を得たのか。和辻哲郎『ニイチエ研究』はいかにして、ほぼ完成された形の生命主義的論法や語法、語彙をもち得たのか。両者の思想形成の源流となるものが明確になれば、

西田哲学をどのような文脈のもとに理解するべきか、『ニイチェ研究』を思想史上のどのような位置づけで理解するべきかも、より明確になるとともに、大正生命主義がいかにして成立したかという、その発祥の過程がより具体的に明らかになるだろう。登張竹風の存在は、そのための有力な手掛かりの一つになると考えられる。

別の角度からの一つの示唆として、『ニイチェ研究』に新たな視角から検討を加えた、シュタイナー研究家河西善治の論を挙げておく。⁽²⁵⁾河西は、『ニイチェ研究』中の文言の多くが、ルドルフ・シュタイナー『ニーチェ——同時代への闘争者』⁽²⁶⁾の祖述である事実、および『善の研究』の「第一編 純粹経験」がシュタイナーの『ゲーテ的世界觀の認識論要綱』を下敷きにしたと見られる事実を挙げ、『ニイチェ研究』や西田幾多郎を含む京都学派の思想形成にかかわるシュタイナーの役割の大きさを析出している。神秘思想家であるとともに教育学者でもあったルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861年～1935年) は、宗教や芸術に重きをおいた独自の教育理論で知られている。大正生命主義成立論を考える上での有力な検討材料のひとつとして、今後の調査課題としたい。

以上概観してきたように、生命主義者として西田幾多郎がどのように規定されるかについてはまだ不確定な部分

も多く、検討が始まったばかりと言つてよい。続く節では西田哲学について、生命主義文芸論との交渉、という観点からの一考察を試みる。

3 『善の研究』とそれ以後

以下、西田幾多郎を生命主義者に位置づけられる所以を確認した上で、その文芸批評スタンスに生命主義的発想を内包していた小林秀雄⁽²⁷⁾のうちに発見できる、西田哲学の影響の一側面を検証することによって、西田、小林双方の発言を理解するために想定されるべき文脈の復元を試みるものである。

まずは西田哲学の出発点とされる『善の研究』に見られる典型的な生命主義的言論を確認する。それがとりわけ明らかに表出されているのは、『善の研究』全四篇中、「第三篇 善」のうち「人格」と「善」の関係を述べた、「第十章 人格的善」の章である。生命主義の特質として、人間の内奥にあつてその人の意識や行為を暗に統合し宰領している、意識以前の根本動力の想定があつた。和辻『ニイチェ研究』に言う「意識の奥底を人間の根本生命として説く」⁽²⁸⁾観点である。西田は「我々の意識は元来一の活動である。其根底にはいつでも唯一の力が働いて居る。知覚とか衝動とかいふ瞬間的意識活動にも已に此力が現はれて居る。」⁽²⁹⁾

として、その典型を示す。我々の「意識内容は此力に由つて成立するもの」であり、しかも「意識の内容を個々に分析して考ふる時は、此統一力を見出すことはできぬ」、「分析理解すべき者ではなく、直覚自得すべき者である」とした上で、次のように言う。

斯の如き統一力を此処に各人の人格と名づくるならば、善は斯の如き人格即ち統一力の維持発展にあるのである。³⁰⁾

つまり人間の内奥にある意識以前の根本動力を「統一力」ととらえ、さらにそれを「人格」と言い換え、「善」は人格の力を発展させる行為である、と意味づけているわけで、隠れた根本動力である「生命」の力を増大させよという、和辻説くところのニーチェ思想そのものと言ってよい観点が示されている。同じ思想潮流のうちにあると位置づけられることはまれな『善の研究』と『ニーチェ研究』(前節に述べたように、近年はその認識が広まりつつあるが)の、非常に近い関係が明らかである。右の「人格」はさらに次のように言い換えられる。

我々の人格とは直に宇宙統一力の発動である。即ち物心の別を打破せる唯一実在が事情に応じ或特殊なる形に於て現はれたものである。³¹⁾

右に見る「人格」と「宇宙統一力」を直結させる発想も

また、生命主義の特質をなす一つであり、「人格」、「宇宙」、「統一力」といった用語、およびこれらを「唯一実在」ととらえる発想等、すべてが濃厚に大正生命主義的兆候を示している。ただ、大正生命主義においては「人格」の言い換え表現と言つてもよい「生命」の語が、ここでは明確に生命主義的文脈では見られず、「生命」主義と名付けるのは未だややためらわれる段階ではある。別の見方をすれば『善の研究』は、大正生命主義が成立するにあつて、その基本的発想はそれ以前にすでにほぼ形成されており、そこに「生命」の概念が合流しさえすればよい状況にあつた事実を体现する書物だと言うこともできるだろう。

明確に生命主義者としての西田幾多郎が形成されるのは大正期に入つてからである。一九二二(大正十〇)年発表の「感情の内容と意志の内容」では、「総ての根底は唯、一生命あるのみである」等と、「唯一実在」をさす語としてはつきりと「生命」が使用され、『善の研究』で中心的な役割を果たしていた「人格」をしのぐ存在感をもつに至っている。また、「芸術」との関係が次のように示される。

芸術的作品は我々の内面的生命の発露である、我々の人格の創造である。……我々の文化現象の社会も芸術的作品と同じく創造的人格の所作である。深い大きな人生の発露である。種々の国民の言語、風俗、習慣、

制度、法律から神話伝説等、すべて此精神の表現た
ざるものはない。³³⁾

すべての根底にある「唯一實在」とされた「人格」が、「**「内面的生命」**と等価で結ばれ、芸術作品もまたその「発露」として緊密な関係に位置づけられる。そこから次のような認識が引き出されるのは自然だろう。

真摯なる生命の要求の上に立たない芸術は単なる遊戯でなければ、技巧に過ぎない。而して真摯なる生命の要求を離れて何処に道徳といふべきものがあるであらう。³⁴⁾

右は「真摯なる生命の要求の上に立」った芸術作品こそ高く評価するという姿勢を表明しており、生命の量によって芸術作品の価値をはかりたいとした高村光太郎の発言を彷彿させるものである。また、「芸術」と直結するような「生命」が、「道徳」とも直結するものとしてとらえられている点にも注意しておきたい（芸術教育論思潮は、道徳教育、宗教教育と直結する強い傾向をもっていた）。「生命」と「芸術」の直結という観点は、「人格」の価値が「芸術」の価値と直結するという判断姿勢でもあり、実際に「人格価値を離れて芸術価値はあり得ない。その他は技巧に過ぎないのである。」³⁵⁾といった文言にそれが表れている。これに『ニイチエ研究』の文言をつきあわせてみる。

芸術の価値はその**手法形式**によつて定まるのではなく、**生命の横溢**より創作せられたか否かに依つてのみ定まる。……〔**芸術創作**は〕自己目的なる**生命の高潮**とその必然性の表現とである。³⁶⁾もしさうでないとするれば、それは真の芸術創作ではない。

西田による「真摯なる生命の要求」がなければ芸術はただの技巧だ、という主張に対して、和辻の、「**「芸術の価値」は「手法形式」**ではなく「**生命の横溢**」の度合いによる、という主張の同質性は明らかである。高村「**「緑色の太陽」**（一九一〇）と『ニイチエ研究』（一九一三）、および西田「**「感情の内容と意志の内容」**（一九二一）に観測されるこうした類似は、おそらく三者の単なる相互影響関係を示すと言うよりは、三者が同じ大きな思想潮流の中に位置していたことを意味する。右に見られるような論調、語彙は同時代に広く多分野にまたがって観測され、相互の影響と言うよりは全体としてひとつのエコールとしてとらえられる観を呈しているのである。

西田と同じくいわゆる大正教養派に属すると目されている阿部次郎の著作に類例を見て見る。論者は「大正教養派」が人格主義傾向をもつに際して、かなりの度合いで大正生命主義にコミットしていると目しており、大正生命主義の一支流とさえ言うてよかろうと考えている。たとえば

著作に『人格主義』（一九二二）をもつ阿部は、明治三〇年頃より流行を見せた修養主義および人格主義思潮の申し子とも言える存在でありつつ、生命主義的な発想をその基本的な姿勢としている。『人格主義』中で阿部は「芸術作品は精神的生命の象徴として、我々の心に人格的生命の共鳴を喚起するところにのみ意義を持つている。」³⁷として、芸術、生命、人格を直結させる意識を露わにしている。『人格主義』に五年先んずる『美学』（一九一七年）では、「美の内容は人格価値を構成するものゝ一切である」³⁸と宣言しつつ言う。

我等が美的観照を以て物象に対するとき、その物象の特質につれて必然に我等の中に喚起される生命の動きは、我等の全人格の欲求と一致するか矛盾するか、共鳴するか反発するか、孰れかの関係に立たなければならぬのである。そうしてそれが全人格の生活欲求と一致するとき、我等はその物象を観照しつゝ、……自命は高められ、豊かに、肯定される。³⁹

対象によって喚起された主体の「生命の動き」が、同じ主体の「全人格の欲求と一致」すれば、その主体の「人格の生命は高められ、豊かに」なる、という構図は、芸術に対する鑑賞姿勢を生命主義の観点からとらえたものである。

たとえば和辻は次のように言う。

強烈なる生命表現の芸術に接する時、鑑賞者の生命は力を受けて興奮し、その芸術に自己の表現を見るのである。⁴⁰

鑑賞する資格のある者は、芸術に接したとき内にある生命が興奮しつゝ呼応し、……この状態に於ては、鑑賞者には主客の關係なく個人なく、唯表現されつゝある自己あるのみである。⁴¹

阿部の言う、鑑賞対象の生命に共鳴した鑑賞主体の生命が活動力を高める、という構図が、見事に和辻説くところのニーチェ思想と合致する様を確認できる。また「美的観照」行為は「全人格」をもつて行われると言うのであり、その、生命活動の全体をトータルにとらえる姿勢の表象であった「全人格」の語が、生命主義の特質を如実に表している。それがまた西田の言論との「シンクロニシティ」をもつており、彼等が同じ一つのエコルに属する言論家として同質性をもっていた痕跡を示している。西田は言う。

道徳的立場にいたつて自由我が真に自己自身の立場に達し、生命の真意義が顕現的となるのである。所謂勸善懲惡を以て芸術の手段と考へる如きは固り幼稚なる芸術観にすぎないが芸術を反道徳的と考へるのも真に深く芸術を解するものではない、芸術に於て肉の歎美、

悪の同情の底にも全人格の光がなければならぬ。⁴²⁾

西田にとつての善および道徳とは、自己の内奥の生命を「維持発展」する行為であり、その立場に立つて初めて「生命の真意義」が顕現するような行為である。内奥の生命の発露である芸術はしたがって、きわめて道徳的なものとされ、それは生命の活動の全体を包含する「全人格」の営みを反映したものとされる。続けて西田が「此の如き全人格の統一の働きは始からすべての美の根底に働きつゝある⁴³⁾」とする点も、こうした生命のトータルな営みの根本が、生に統一と方向性を与える統一力にあるとされる点も、典型的に生命主義の特質を示しており、その姿勢自体については『善の研究』との齟齬は見られない。生命主義者としての下地をすでに十全に身につけていた西田が、大正期にはいつて「生命」をはじめとする生命主義特有の語義をもつ用語を、生命主義的な文脈で装備するに至った、という経緯が、これによって理解されるのである。

4 小林秀雄の中の西田幾多郎——両者の「シンクロニシティ」

小林秀雄の批評思想や文言がその多くを、生命主義の一翼を担う哲学書、和辻哲郎『ニイチエ研究』に負っている事実については、別稿で論じてきた。小林に限らず、先行

する多くの言論を吸収する行為は自己の言論姿勢を形成する上で必然ではあるが、生命主義の観点を、他の生命主義的な言論家たちによるやや神秘思想がかったそれとは異なる、抜きんでて理論的な言葉で語ったのが小林秀雄である点、およびそれゆえに生命主義が潜在的にもつていた可能性を最も説得力ある形で展開し得た言論家であったという点に、小林の批評家としての独自性があつたと、論者は考えている。その意味で小林秀雄評価に際して、その生命主義の根底を探ることに意味があるわけである。

小林秀雄が、身心不可分の生の営みの全体を「肉体」という用語に表象していたことは別稿で述べた。そうした主客合一、身心不可分の観点は、「美と善」（一九二二年）における西田の「我々の自己はその創造的方面に於て、知行、行即知である。芸術家の創造的作用はそれが行であると共に知である。筆の先、鑿の先に眼があると云ふべきであらう⁴⁴⁾。」といった文言にも表れている。これを小林秀雄の「作者の精神は常に彼の技術と不離である。人は思案するものが画家の頭であるか指先であるか知る由もない。作者の技術論とは彼の認識論以外のものを指しはしないのである⁴⁵⁾。」といった文言と比べても、それ自体は常識的判断が偶然に一致した、という域を出ないかもしれない。しかし西田と小林の「シンクロニシティ」は随所で発見される

のであり、たとえば西田は同じ「美と善」において、「一度は芸術家が物を見ると同一の態度を以て物を見なければならぬ、芸術家が物其物の中に生きる如く一度物其物の中に生きて見なければならぬ。」といった言い方で、芸術作品の鑑賞に際しては外側から解析するのではなく、創作者と同じ視線を共有せよ、とする。一方、戦後になって発表された小林の文言中、古典への対し方を述べた部分には次のようにある。

人間の事物といふ非合理的な実体は、私達に、その中で生きて考へて欲しい、考へられなければ感じて欲しい、といつも要求してゐる。この要求は、こちら側の見方や考へ方のご都合な整備などには一顧も与へはしない。⁽⁴⁶⁾

これを比べてもまだ、偶然の一致の域を出ない程度の類似であるかに見える。しかし鑑賞態度に関するこの視角は、生命主義の言論では頻出するものであり、生命主義的傾向をもっていると判断しうる言論家の言葉であるならば、こうした論点の表明は必然的なものである。つまりこれも生命主義特有の、芸術作品に対するスタンスの取り方の表れであると言える。和辻は言う。

ニイチェは美学の多くが受くる者即ち鑑賞者の側より人間の美的活動を見やうとするのを攻撃し、

鑑賞も亦間接の創作である故に、美学は必ず創作者即ち与ふる者の側より出立しなければならぬ、とするのである。⁽⁴⁸⁾

「創作者即ち与ふる者の側より出立」するとは、鑑賞者が創作者と同じ視線を共有することである。右に見られる西田、小林、和辻の論点の一致は、偶然の一致というよりは、こうした論点を表明するのが、生命主義的スタンスで発言するためには必要な手順だからだと言うべきである。

芸術に対する対し方を表明することが、「生命」表現の典型である芸術創作を語るために必要であり、芸術創作の原理（内なる生命の表現という意味での）を語ることによってはじめて、生命主義の原理を十全に語ることができるからこそ、この「シンクロニシティ」は生命主義者たちの言論に必然的に現れるのだ。

生命主義的観点から見れば、創作者の側に立つとは、「人格」を軸として対象の生命活動の全体をとらえるような鑑賞態度を言ったものと理解できる。小林が「様々な意匠」（一九一九年）で「搦め手から」の批評、すなわちその作品がいかに創作されたか、を批評の観点として選ぶ、と最初に宣言するのも同じ態度を表明したものである。『ニイチェ研究』は「美学」について、外面的な「手法形式」の面からとらえようとするものだと批判し、小林

の「様々なる意匠」は美学を、芸術を「表現技術の一種」としてとらえるものだと批判している。同じエコールに属する者どうしの言論相互において、シンクロニシティは同時多発的に観測されるのである。

こうした論点の一致が生命主義傾向をもつ多くの言論家に共通して見られるものであることを示すために、もう一例だけ挙げておく。教育学者である榎山栄次の『新教育論』（一九二五年）には、「賞翫とは如何なることかと云ふに、芸術品の作者が其芸術的活動を為すときと同じやうにその心持を進めて行くことである」といった文言がある。付言すれば、これは榎山のみならず、生命主義教育論者には同時期によくみられる論点である。

とは言え、創作者の視線を共有せよ、対象作品の内側に入り込め、という主張自体は常識の域を出ず、これらの事例から小林秀雄の生命主義的なスタンスを帰納することは難しいかもしれない。しかし西田が小林に与えた最も大きな影響は、歴史認識に関わるものだと思う、そのスタンスには比較的強い独自性がある。つまりこの観点から両者を比較すれば、影響関係の指標として妥当性の高い結果が得られると思われる。以下に、その足がかりとなる比較結果を示す。

右に引用した「弁名」で小林は、荻生徂徠が問題にした

言葉である「道」について、「道とは、形ある個々の物の名ではない。物全体の『統名』なのだ、と彼は言ふ。人間経験全体の名だと言つてもよい。人間の生活力の総合的な表現だと言つてもよい。それは全く形のないものである」と解説しつつ次のように続けている。

「物アレバ名アリ」の自然状態で、人間が暮してゐることは、人間が、ばらばらになつて暮してゐるやうなものだ。各人の心も目も、外に在るばらばらな物の名から離れる事が出来ないやうでは、人間生活の意味というやうなものは生じやうがない。道といふ統名の発見によつて、はじめて、人々の個々の経験に脈絡がつき、人間の行動は、一定の意味を帯びた軌道に乗るやうになつた。

徂徠は道の弁名によつて、さういふ精神の目覚めを語つてゐると見てよい。⁽⁴⁹⁾

ここで「道」は人間の生の営みの全体を統合する力としてはたらくものと定義されており、生命主義的文脈における「人格」・「生命」ときわめて近い意味合いを担わされている。「道」が「人間の生活力の総合的な表現」であるとの言い換えも、和辻が「根本生命」と同義の語として多用していた「生活の力」の用例にきわめて近い語の用い方である。和辻と小林が同じ文脈で物を言っているのであれば、

右で小林は、生命の活動を「全的」にとらえる生命主義的な視角の発見を説いているのである。それは歴史（古典）認識においてどのような様態をとるのか。小林は、現代の歴史学者たちの方法的な歴史認識の態度に對置されるものとして、理想的な古典への対し方を次のように言う。

彼等〔仁斎や徂徠〕が、古典を自力で読まうとしたのは、個性的に読まうとした事ではない。彼等は、ひたすら、私心を脱し、邪念を離れて、古典に推参したいと希つたのであり、もし学者が、本来の自己を取戻せば、古典は、その真の自己を現す筈だと信じたのである。彼等に問題だつたのは、古典に接する場合の、人間としての学者の全的な態度なのであり、如何にして無私を得ようかと案ずる倫理的態度だつたのであつて、彼等が身につけたこの無私な態度は、今日言ふ学者の人格とは関係のない研究の客観的な方法とは、全く意味合ひが違ふのである。^①

右で「今日言ふ学者の人格とは関係のない研究の客観的な方法」を批判する言い回しは、裏返せばこれが、「古典に接する」際の「人格」を軸とした姿勢を標榜する文章だということの意味する。この「人格」は、「人間としての学者の全的な態度」であり、「無私な態度」を得ようとする「倫理的態度」であるので、人格の全的な営みが「道

徳」に直結する人格主義、生命主義の論法・語法との共鳴の度合いは高い。つまり小林は、主観を重んずるという意味での単なる人格主義的な古典解釈を述べているのではなく、生命主義における、心身合一した生命のトータルな営みの軸となるような意味での「人格」を基盤とした古典解釈を、ここで標榜しているのだと理解される。するとここでいう「無私」とは、近代的意識的「自我」の陥穽からの脱却という、生命主義のもつ大きな方向性の言い換えと考へ得るだろう。

先に示した西田「美と善」中に、「道德的立場にいたつて自由我が真に自己自身の立場に達し、生命の真意義が顕現的となるのである」とあつたことも想起したい。芸術鑑賞において「道德的立場にいた」とは、自己の内奥の生命を「維持発展」することであつたし、そうして対象を「全人格的」ととらえることによって、「真に自己自身の立場に達」することができ、またそこに「生命の真意義」があらわれると、西田は言う。「真に自己自身の立場に達」するとは、意識的な自我、理性に頼つて対象を見ようとする状態からの解脱を意味するだろう。小林が古典学者の姿勢を、「もし学者が、本来の自己を取戻せば、古典は、その真の自己を現す筈だ」と代弁するのは、西田と同じ意図を、近世の古典学者になぞらえて言いなおしたのである。

こうした小林と西田との「シンクロニシティ」は、それらの箇所を相互参照し、両者の文言の背後にある文脈の一致を検証することによって、両者の文言の真意が析出されるような関係にあると言つてよいだろう。

西田幾多郎と小林秀雄の「シンクロニシティ」は、本稿で例示した箇所には限らず多数観測されるが、構成上、ここでの例示は割愛した。続稿にてより具体的な検討を行いたい。こうした、小林が享受した先行思潮の痕跡を逐次検討することで、小林秀雄の言論がもつ本来の生命主義的文脈が掘り起こされ、正当な小林評価がなされるための前提、基盤を確定していく作業に貢献しうるものと期待される。本稿で指摘しえた事柄は未だごく些細な範囲にとどまるが、そうした、小林秀雄を「読む」ための文脈の復元という、注釈的作業の一端を試みたものである。

注

引用文において適宜旧字は新字に改めた。引用文中の(一)内は論者による補足である。引用文中の中略・省略は「……」で示した。

(1) 永井隆則「日本におけるセザンヌ受容史の一断面——一九二〇年代の人格主義的セザンヌ解釈の形成と行方」『ユリイカ』総頁特集「還ってきたセザンヌ」第二八巻第十一号、一九九六年九月、一八九頁)

(2) 永井隆則「日本のセザンヌズム——一九二〇年代日本の人格主義セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する思想及び美術制作の文脈について」『美術研究』第三七五号、東京文化財研究所美術部、二〇〇二年三月

(3) 永井隆則『セザンヌ受容の研究』中央公論美術出版、二〇〇七年三月

(4) 拙稿「眼の陶冶」と帝国主義(一)——大正期文芸教育運動の「芸術愛好」(『京都語文』二〇〇〇年十月)以下の一連の論文にて例証した。

(5) 拙稿「小林秀雄と生命主義美術批評——「人格」主義から「肉体」の思想まで」(『京都語文』二〇〇七年十一月)

(6) 和辻哲郎『ニイチエ研究』(東京内田老鶴園、一九一三年)がもつ生命主義傾向については、拙稿「教育論の中の大正生命主義——小林秀雄と芸術教育論」(『文学部論集』、佛教大学、二〇〇一年三月)、「初期小林秀雄と生命主義——「生の哲学」と人格主義との接点」(『文学部論集』、佛教大学、二〇〇七年三月)等で例証した。

(7) 拙稿「初期小林秀雄の思想形成——ニイチエ「力への意志」と「宿命」」(『稿本近代文学』一九九四年十一月)等で例証した。

(8) 鈴木貞美「西田幾多郎「善の研究」を読む——生命主義哲学の形成」(『日本研究』第十七号、国際日本文化研究センター、一九九八年二月)

(9) 鈴木貞美「西田幾多郎と生命主義」(ポロランド日本学会口頭発表、二〇一〇年十一月)、国際日本文化研究センター・ウェブサイトによれば、同大会報告書に「西田哲学の意味——地球環境が問われる時代に」の論題で掲載予定。

(10) 檜垣立哉「西田幾多郎と大正生命主義」、『西田幾多郎の生命哲学』講談社学術文庫、二〇一一年一月、初出は「大正生命主義と生政治」(『フランス哲学・思想研究』第十四号、日仏哲学会、二〇一〇年)。なお、学術文庫版の元版である『西田幾多郎の生命哲学——ベルクソン、ドゥルーズと響き合う思考』(講談社現代新書、二〇〇五年一月)にはこの論考は収録されていない。

(11) 拙稿「〈眼の陶冶〉と帝国主義(三)——大正期芸術教育論に見る国民国家形成の影」(『文学部論集』、佛教大学、二〇〇三年三月)でこれに言及した。

(12) 湯浅弘「和辻哲郎と生の哲学——『ニイチェ研究』を中心に」(『比較思想研究』二〇〇二年三月)

(13) 鈴木貞美「和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術観——『ニイチェ研究』をめぐる」(『日本研究』二〇〇八年九月)

(14) 「生命」が現れる箇所のうち、生命主義的な用法にかなり近いものとして、次のような用例がある。ここには「絶対無限の力」への「合一」という主題はあるが、この「生命」は「肉体的生命」の対極としての「真生命」を意味しており、生命の活動の全体を宰領する原動力や統一力としての生命主義的「生命」と合致しているかどうかは大変微妙である。

宗教的要求は自己に対する要求である、自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限の力に合一して之に由りて永遠の真生命を得んと欲するの要求である。パウロが既やわれ生けるにあらざる基督我にありて生けるなりといった様に、肉体的生命の総べてを十字架に釘けりて独り神に由りて生きんとするの情である。

(西田幾多郎「善の研究」弘道館、一九一一(明治四四)年一月三〇日、二一九頁)

(15) 高村光太郎「緑色の太陽」(『スバル』第四号、一九一〇(明治四三)年四月一日)

(16) 同、三七〜三八頁(「内の訳語は論者による。ただし高村自身による他の個所での言い換えに従った。')

(17) 和辻は次のように言う。

芸術の価値はその手法形式によつて定まるのではなく、生命の横溢より創作せられたか否かに依つてのみ定まる。(『ニイチェ研究』三二八頁)

(18) 柳宗悦「革命の画家」(『白樺』一九一二(明治四五)年一月一日、四頁)

(19) 山脇信徳「断片」(『白樺』一九一一(明治四四)年十二月一日、九八頁)

(20) 和辻哲郎「ニイチェ研究」東京内田老鶴圃、一九一三(大正二年、六六頁)

(21) 同、六七頁

(22) 同、二二一頁

(23) 登張竹風「新教育論 芸術篇」有朋館、一九〇三(明治三六)年九月、一三一頁

(24) 同、一六五頁

(25) 河西善治「京都学派の誕生とシュタイナー——『純粹経験』から大東亜戦争へ』論創社、二〇〇四年八月

(26) ルドルフ・シュタイナー『ニイチェ——同時代への闘争者』西川隆範訳、アルテ、二〇〇八年五月、Rudolf Steiner, Rudolf Steiner, and Friedrich Nietzsche, 1895

(27) これについて前記拙稿「教育論の中の大正生命主義——小

林秀雄と芸術教育論」等で例証した。

- (28) 『ニイチエ研究』六七頁
- (29) 西田幾多郎『善の研究』弘道館 一九二一年一月三〇日、一九五頁
- (30) 同、一九六頁
- (31) 同、一九七頁
- (32) 西田幾多郎『感情の内容と意志の内容』(『哲学研究』第六号、一九二一(大正十)年四月一日、二七頁)
- (33) 同、四五頁
- (34) 同、二七頁
- (35) 同、四五頁
- (36) 『ニイチエ研究』三二八～三二九頁
- (37) 阿部次郎『人格主義』岩波書店、一九二二年、一二七頁
- (38) 阿部次郎『哲学叢書第六編 美学(改訂版)』岩波書店、一九二七(大正六)年四月十五日、二三一頁
- (39) 同、二〇〇頁
- (40) 『ニイチエ研究』三三二頁
- (41) 同、三三六頁
- (42) 『感情の内容と意志の内容』二八頁
- (43) 同、三六頁
- (44) 西田幾多郎『美と善』(『哲学研究』第七八号、一九二二(大正十一)年九月一日、一〇〇頁)、この後「我々は此立場に於て知識によつて達することのできない世界を歩みつゝあるのである。」と続く。
- (45) 小林秀雄『アシルと亀の子 二』(『文芸春秋』一九三〇年五月、『文芸評論』白水社、九十頁)
- (46) 『美と善』一一九～一二〇頁

- (47) 小林秀雄「弁名」(『文芸春秋』一九六一年十一月、『考へるヒント2』文芸春秋、一九七四年十二月、七十三頁)
- (48) 『ニイチエ研究』三三四頁
- (49) 榎山栄次『新教育論』目黒書店、一九二五(大正十四)年二月
- (50) 「弁名」六六頁
- (51) 同、六一頁

本稿は、佛教大学平成二二年度特別研究助成(個人特定研究)による成果である。